

由良川・大堰川連結通船路計画について

川 名 登

要 旨

東北日本と大阪・京都を結ぶ巨大な物資流通、その中心をなす西廻り海運の効率化と危険回避を目的として、内陸水運を利用して日本海と瀬戸内海を短距離で結ぶ水運路を開発しようという計画が現れてくる。その一つとして、日本海に河口を持ち丹波山地に源流を発する由良川と、同じ丹波山地より流出して、末は京都・大阪へ流れる大堰川を上流部で接続して、京都・大阪への捷路としての内陸水運路を創出しようという計画が、江戸・大坂の商人によって考えられ、幕府への出願が繰り返された。この頻繁に浮上する計画を、年代的かつ系統的に検討して、水運路開発の持つ問題点と、その意義を明らかにしようとしたものである。

キーワード

由良川水運、大堰川水運、日本海・瀬戸内海連結水運路、河村与惣右衛門

目次

はじめに

一 水運路計画の前提

二 元禄・宝永期の計画

三 享保期の計画

四 宝暦期の計画

五 明和・安永期の計画

六 天明期の計画

七 文政・天保期の計画

八 文久・元治期の動き

まとめにかえて

はじめに

日本海に面した由良湊に河口を持つ由良川は、源流を丹波山地に発するが、同じ丹波山地より流出して、末は京都・大坂へ流れる大堰川と上流部で近接する。この両河川を近接部分で結んで、日本海と瀬戸内海をつなぐ本州横断水運路を創出しようという計画が生まれてくる。

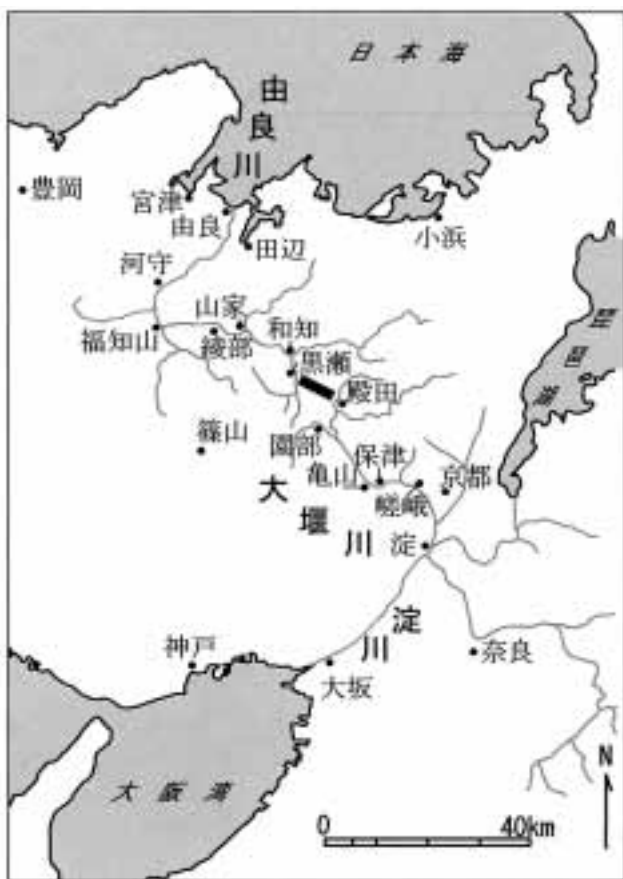
それは、寛文期から盛んとなってくる東北日本と大坂を結ぶ西廻り海運が、その持つ海難の危険と輸送日数の長さという最大の欠点を、解消しようとする方策の一つであった。

この水運路計画に研究者として最初に注目したのは古島敏雄氏であった。氏は「新旧運輸機関の対立・抗争」⁽¹⁾の中で、既存の機関と競争関係に立つ運輸機関の新設は、既存の機関との利害関係を考慮して検討されるとし、その一例としてこの由良川・大堰川水運路計画を取上げる。しかし、使用された史料は『大阪市史』収載の史料のみであったので、明和七年の計画と天明五年のそれとの「両計画の関係は不明」として、この計画の全体像を明らかにすることはできなかった。

その後、いくつかの在地史料の発見があり、それらを駆使して藤田叔民氏が、「宝暦・天明期の計画」・「文政・天保期の計画」としてまとめられた。⁽³⁾しかしここでも宝暦以前の元禄・享保期の計画や、天保期以後の動向については触れられなかった。次いで、杉本嘉美氏は須藤家・片山家文書等により関係資料を集められ、これに基づいて芦田完氏は「由良川水運史」⁽⁵⁾の中で、「由良川と大堰川並びに加古川連絡ルートの請願」と題して取上げられ

たが、「由良—加古川ルート」と混合して述べられたため、各時期の計画出願の関連を明確にすることはできなかった。

そこで本稿では、現在知られている史料のみに依るが、各時期の由良川・大堰川連結水運路計画の実体をできるだけ明らかにし、水運路開発の持つ問題点と、その意義を考えてみたい。



由良川・加古川連結輸送路図

一 水運路計画の前提

由良川・大堰川水運路計画の目的の一つとなる由良川筋より京都嵯峨への年貢米の廻送は、既に寛文期以前からみられる。寛文七年十月、但馬出石藩の蔵米の「嵯峨廻」を請負った角倉平次は、その藩米の領内通過の許可を福知山藩に要請したが、その記事の中に「先年丹後宮津米並主殿頭蔵米さかへ出候刻」とあり、これ以前に丹後宮津藩や福知山藩（藩主・松平忠房）の蔵米が京都嵯峨に廻送されていたことが知られる。

これら蔵米の廻送が、どのようなコースで運ばれたか明らかではないが、この頃までには由良川河口の由良湊から福知山あるいは綾部辺までの水運が開かれていたと思われるので、これを利用することが当然ながら考えられる。⁽⁷⁾ また大堰川の通船権を握る角倉平次が関係している所から、大堰川の水運が使用されたことも当然である。とするこの両水運を結ぶルートはどこにあったであろうか。元禄十五年に綾部藩が幕府代官の質問に答えた「覚」⁽⁸⁾には、藩蔵米の一部は「小出伊勢守様御領分鳥羽村迄陸地ヲ出し、鳥羽村々舟ニテ嵯峨着、京弘ニ仕候」とあり、また領内百姓米は過半は和知で売払うが、「上方道・松山須知村へも出し申候」とある。これにより、福知山或いは綾部より松山村、須知村、園部を経て大堰川の河岸である鳥羽に至る蔵米輸送ルートが存在していたことが知られる。恐らく諸藩の蔵米も、このルートで運ばれたのであろう。しかし、この陸送路には山坂が多く、五〇キロを越える程の長距離であったので、これを出来得る限り短縮しようという考えが現れる。それは、由良川およびその支流を出来得る限り上流まで船で遡り、大堰川上流の舟運と最も近接した地点で両者を連結しようとする計画であった。

二 元禄・宝永期の計画

由良川と大堰川を結ぶ水運路計画の現在までに知られる最初は、元禄十三年である。この年四月、江戸の「すわ町半左衛門、駒かた彦三郎、横山町弥兵衛」の三名が綾部藩江戸屋敷に「丹後国由良湊々京嵯峨迄之川舟通路之事」を出願した。⁽⁹⁾しかしこの願書の中に、「先年々数多願申上候者共御座候得共」とあって、同じような計画がこれ以前にも幾度か出願されたことがあった事を語っている。それらは川中に設けられた田地用水のための井堰の障りになるとして全て許可されなかった。そこでこの計画では、用水の不用となる秋八月より二月までに期間を限って通船し、壹ヶ年に金三百両を運上として上納するというのである。この出願人達の代表者と思われる江戸すわ町の近江屋半左衛門は、京都に至って綾部藩の京都在番と思われる吉川勘左衛門に頼み込み、藩重臣宛の書状を持って綾部に赴き、川筋見分と役人への面会を願い出たが、藩はこれをあまり重要視しなかった。同じように近江屋半左衛門は園部藩、山家藩にも赴いたようである。綾部藩の日記⁽¹⁰⁾には、「御領内川筋見分仕度由願ニ付、勝手次第見可申由、申渡ス、其上御役人中之内へ逢申度由願候へ共、園部・山家ニ而も重き役人ハ出会不申候由ニ付」とある。

しかし、この近江屋半左衛門等の計画のルートがどの様なものであったか明らかではないが、綾部・山家・園部各藩領を通過するところから、この後に出る多くの計画と同様に、由良川上流の和知から支流高屋川に入つて黒瀬村まで舟行し、それより陸路で大堰川の上流殿田に出て、大堰川を船で下るルートであつたろうと推測される。その後、この近江屋半左衛門等三人よりの出願が、どの様になったか明らかではない。

次いで元禄十五年二月、幕府代官長谷川六兵衛が上使として京都葛川から由良村まで、大堰川・由良川筋の实地見分を実施している。⁽¹¹⁾ この一行は上下一九人で、通行する各宿村に対して人足二人、馬四疋、駕籠四丁を用意する様に先触を出しているが、二月二十三日には味方村を経て綾部の延村に泊っている。⁽¹²⁾

ここでは綾部藩役人に対して知行所払米の送先等について尋ね、藩役人は知行米、家中米、百姓米の地払、京都払等について書付を提出している。⁽¹³⁾ 恐らくこの時は、この由良川・大堰川ルートによる沿岸諸藩の年貢米廻送も考えられていたのであろう。翌二月十四日に代官一行は由良・松原等に泊っている。⁽¹⁴⁾ 恐らく綾部より由良川を船で下ったのであろう。そして翌二十五日には由良川に沿って遡り、北有路村に泊っている。この代官一行の見分に接した村の庄屋は、「大河筋、京都まで米上がる由」と記し、この後由良川を経由して廻米が京都に送られるようになる⁽¹⁵⁾と認識している。しかし、この幕府代官の見分は近江屋半左衛門等の出願に対応するものではなかったようである。それはこの後の「元禄年中、田辺屋権四郎与申ものえ、通船御免申渡候」⁽¹⁶⁾と大坂商人と思われる田辺屋権四郎⁽¹⁷⁾が幕府より通船許可を得ているので、代官見分はこれに対応するものであったと思われる。

田辺屋権四郎の幕府への出願は、元禄十四年頃と思われるが、明らかではない。その計画は、「丹後由良湊丹波黒瀬村迄、川筋舟往来之儀」⁽¹⁸⁾とある如く、由良川より支流高屋川に入って黒瀬村を経由し、大堰川舟運に接続するものであったようである。これを「御公儀様へ御願被成、此度貴殿へ被仰付候三付」⁽¹⁹⁾と、幕府の許可を得ている。その後、田辺屋権四郎は通船工事に着工したようで、宝永三年三月には綾部の下の栗村井関南詰に通船路としての新川を掘る為に、位田三カ村の畑を買収している。⁽²⁰⁾ しかしその後は何の動きも見られない。恐らく綾部より黒瀬村の区間は難工事で、工事は中断してしまったのであろう。

二 享保期の計画

享保七年十月、大坂南庵徳町の山城屋吉右衛門は園部藩奉行に「覚」⁽²¹⁾を提出した。それによると、先年親・猪兵衛が和知川筋通船を請負い、子息である吉右衛門と共に黒瀬村に滞在していたという。恐らく前述の田辺屋権四郎と組んで通船工事に従事していたのであろう。しかし「右之川舟中絶仕候ニ付」⁽²²⁾と、先述の如く田辺屋の計画は中断してしまった。そこで「此度再興相続願申上」⁽²³⁾げているという。恐らく田辺屋計画の再興相続を幕府に依頼したのであろう。「綾部藩役所日記」の享保十年二月の条に「丹後由良ノ湊々嵯峨迄、川筋通船ノ願人有之」とあるのは、これを指すものと思われる。

幕府はこの出願を受けて、大津代官桜井孫兵衛に川筋見分を命じた。⁽²⁴⁾享保十年二月、桜井孫兵衛は川筋見分を実施してその結果を幕府に報告している。この報告等をもとに、享保十三年五月幕府老中は京都所司代牧野佐渡守へ「山城屋伊兵衛⁽²⁵⁾与申町人」の出願は「難成事ニ候」という判断を伝え、所司代は京都町奉行を通して願人へその旨を申渡している。⁽²⁶⁾これによって、この山城屋伊兵衛による通船再興計画は、幕府の許可を得ることができなかった。

四 宝暦期の計画

宝暦八年、大坂の商人と思われる長栖屋次兵衛は、丹後由良湊より城州嵯峨までの通船を京都町奉行所に願い出た。⁽²⁷⁾これに次いで同年、城州葛野郡谷村の六兵衛も同様に出願した。⁽²⁸⁾六兵衛は田辺屋六兵衛とも云うので、⁽²⁹⁾元禄年間にこの川筋の通船免許を受けた田辺屋権四郎と関係があるのかもしれない。この六兵衛は、長栖屋次兵衛と組合だったともいい、京都の三藤屋次左衛門は長栖屋次兵衛に加入していたというので、⁽³⁰⁾この事業には何人かの商人が出資者として参加していたものと思われる。

この時の長栖屋次兵衛等の計画は、「山城国嵯峨川筋々丹波国船井郡殿田村迄、和知川筋者同郡黒瀬村々川下丹後国由良湊迄之通船」⁽³¹⁾であったので、これ迄の計画とほぼ同じものであったと思われる。

この出願を受けた京都町奉行は、「丹後中は京都御支配ニ無之候間、領主へ可相願」⁽³²⁾と、丹後国は管轄外なのでそれぞれの領主に願出るようにと申渡した。そこで長栖屋等は各領主に願い出、川沿い村々と対談をして、何の支障も無い旨を報告したところ、町奉行より「丹波ヲも差支無之哉、罷下可相尋旨」⁽³³⁾を仰せ付けられた。長栖屋次兵衛は宝暦九年、綾部に赴いて藩に願い出、領内沿岸村々との対談の許可を得ている。⁽³⁴⁾

現存する川筋村々との対談書をみると、宝暦九年二月には、福知山藩領・天田郡上天津村、⁽³⁵⁾同年九月には園部藩領・船井郡中村、⁽³⁶⁾宝暦十一年六月には綾部藩領・野田・新宮・味方・青野・井倉・坪ノ内の六ヶ村のものが⁽³⁷⁾あり、いずれも種々の条件を付した上で、新規通船に支障は無いと云っている。

この様に願人達は村々との対談の努力を重ねたのであるが、結論は宝暦十一年十二月、京都所司代阿部伊豫守の承認の上で、京都町奉行小林阿波守・松前筑前守より「次兵衛願之趣、難取上段」⁽³⁸⁾を申し渡され、この計画は幕府の許可を得ることができなかった。

五 明和・安永期の計画

明和七年一月、前述の谷村の田辺屋六兵衛が、再び願書を差出した。⁽³⁹⁾しかしこれは町役の連判がなかったため差戻しとなったが、同日付で河村与惣右衛門も出願した。⁽⁴⁰⁾河村は「城州淀納所村浪人」⁽⁴¹⁾と肩書にあるように、淀に住み、戦国期から木村孫二郎と並んで淀川の船を支配し、慶長八年に徳川家康の「定書」によって過書奉行となった河村与三郎・与三右衛門の子孫である。この河村与惣右衛門の願には、前述の長栖屋次兵衛と組んでいた京都新シ町御池下ルの三藤屋次左衛門が加入しているし、谷村の六兵衛とも共同していたと思われるので、この出願は宝暦期の出願との連続性が考えられる。

しかし、この河村与惣右衛門等の通船計画が、どの様なものであったか、願書が発見されていないため明確ではないが、願書と共に提出したものと思われる川筋の絵図と、計画書が残っている。⁽⁴²⁾これを見ると、由良湊より由良川を遡り、仁ヶ村と綾部近くの下味方村で船を継ぎ、支流高屋川に入って黒瀬村に着き、それより陸路を大八車で下胡麻村まで運び、再び川船で胡麻川を下って大堰川との合流点である殿田村に着き、それより大堰川を下って保津村で積替え、梅津村で陸揚げして車・人馬によって京都四條に着く。また梅津より船で淀に下り、それより過書船を利用して大坂に着くというものであった。(表1参照)。このコースで通船を実現するためには、次の史料⁽⁴³⁾に見るような川浚・開削工事が必要であったという。

表 1 明和 7 年 由良ー京・大坂輸送計画

	由良湊	仁ヶ村	下味方村	黒瀬	下胡麻	殿田	→(船)
距離	4.0里	7.0里	6.5里	1.5里	1.5里	→(船)	→(船)
運賃	0 ⁷ / ₆ 匁	1 ³ / ₀ 匁	1 ⁵ / ₀ 匁	1 ⁵ / ₀ 匁	(殿田まで)	0 ⁷ / ₆ 匁	5.0里
設置予定問屋株	50株		15株				
設置予定船頭株	船頭株	船頭株	船頭株	車進入馬株	日雇・高瀬舟	船頭株	
設置予定船(車)数	120艘	240艘	550艘	250匁	250艘	400艘	
船(車)の規模	50 ^五 / _匁	30 ^五 / _匁	13 ^五 / _匁	大八車	7 ^五 / _匁	18 ^五 / _匁	
船(車)の乗組員	5人	4人	4人				
設置予定施設	役所	役所	役所	役所		役所	
〃	番所	番所	番所	番所	番所	番所	
〃	蔵	蔵	蔵	蔵		蔵	

保津	→(船)	梅津	→(船)	梅津	→(船)	大坂	計
3.0里	40 ^丁	29 ^里 / ₂ 丁	3.5里	9.0里	41里		
0 ⁶ / ₀ 匁	1 ⁴ / ₀ 匁	7 ³ / ₀ 匁	0 ² / ₀ 匁	0 ³ / ₇ 匁	6 ⁸ / ₇ 匁		
15 ^株					10株		
船頭株	車挽人馬株			過書船			
460艘		300艘					
10 ^石 / _匁		15 ^石 / _匁					
4人							
役所	役所	大役所		役所	役所		
番所	番所			番所	番所		
蔵							

由良湊ー京都(29里余)、運賃7³/₀匁・改料等＝13²/_分
由良湊ー大坂(41里)、運賃6⁸/₇匁・改料等＝13³/_分7匁

一 由良湊々仁ヶ村迄 四里之場所

但シ此間大川ニ而御座候故、中山渡シ船櫓揃ニ而渡シ候事

由良ニ而浜 普請御座候事

一 仁ヶ村々下味方村迄 七里之場所

但シ此間大川宜候、天田之井関^(マ)井関位田之井関綾部之井関、右三ヶ所御座候、是迄常井関ニ而御座候故、分

水ニ仕通船仕候事、分水仕候故、普請御座候、外ニ少々川浚候事

一 下味方村々黒瀬村迄 六里半之場所

但シ此間荒川、其上谷川ニ而御座候、船入場所普請御座候、并井坪之瀧羽たゝきの瀬蛭子之瀬其外所々早瀬御

座候ニ付、此間普請仕候へハ水行宜、通船致能キ川ニ而御座候、且又山家ニ而余程普請場川浚江等御座候

一 黒瀬村々殿田村迄 三里之場所

但シ黒瀬村ニ而船入場所普請所ニ而蔵村胡麻村右両村之内ニ大野原御座候、是ニ新道ヲ付候事、当山際道ヲ付候

積り、尤凡幅拾間程之谷四ツ御座候、右之谷ヲ埋候而道ヲ平ニ仕、大八車人馬等ニ而附越候事、且又下胡麻

村ニ御番所建候事、角村々殿田村迄之道者田地買入候事

一 殿田村々保津村迄 五里之場所

但シ殿田村片町ニ致、是迄在所山際江建替させ申候事

此間川宜候、併殿田村ニ而舟入場所普請、夫々山間少々普請御座候、并熊原辺ニ普請御座候、夫々前々瀬ヲ

直シ普請御座候、夫々保津村ニ而舟入場所普請御座候事

一保津村々梅津村迄 三里之場所

但シ場所之浜高キ処^ラ見立相建候、宇津村辺ニ 相建可申哉、此間^ニ是迄通舟御座候場所併是迄等ハ違舟数夥敷儀ニ付御座候得者、谷間水間直シ普請御座候、谷之内後々者大普請御座候、山本之谷間壹里程之間之事ニ御座候

一梅津々京都四條千本迄 四拾町

但シ舟入場所普請之事、此間四條通堀川迄、道作田地買入普請仕候而大八車人馬等ニ而諸荷物為登申候、大津道之牛車人馬等も此所へ働させ申候事

これらの工事の内、特に綾部から黒瀬村までの区間は、川筋絵図⁽⁴⁴⁾に書き込まれた記事を見ても「此ハタヽキノ瀬大難場、式尺程滝也」や「此所犬戾リト云岩山也、折々崩落也」等々とあつて、難工事が予測される場所であつた。

また、この通船計画の最大の特徴は、次の点にあつた。それは由良湊をはじめ荷物積替の所々に、「御役所・御番所」を設置し、幕府役人を配置する。たとえば由良湊の役所番所には、上役人、平役人、小役人、中間（但シ上乘兼帶）、仲買を置き、新造する川船も「御船三拾石積、四人掛り、式百四拾艘差置」とあるように、幕府の費用で配備する。それに対して荷物運賃・由良湊―京都間一駄につき銀十三匁二分の内から「御益銀」として銀三匁を幕府が取るという、幕府直営部分を持つものであつた。⁽⁴⁵⁾しかし、これに対して京都奉行所は、「与惣右衛門申立候

趣ニてハ、通船請負之筋ニも無之、私共御役所取斗候積ニ相見え、左候而、新船造立之御入用も可有之儀、其外都而差障之筋茂出来可致哉ニ付、御用船杯与申筋之儀者、取用難致儀ニ可有之⁽⁴⁶⁾と、幕府直営などは以の外と、全く関心を示さなかつた。

ただ今度の計画が、京都止りでなく、淀川水運を利用して「大坂表えも運送いたし度旨之願」であつた点は特徴的であつた。そこで京都町奉行は、大坂町奉行室加山城守・神谷大和守に関係者の「障之有無ハ勿論、米相場等ニ響候儀ハ無之哉」⁽⁴⁷⁾との吟味を依頼した。これは明和七年八月二十六日付の大坂町触として出されている。⁽⁴⁸⁾これに對して「大坂表上間屋、上積米屋、北国間屋、米市場年行事、過書・伏見船并上荷茶船、其外米中仕共」は、いずれも「大坂表登せ米」が減少して米値段が高値になり、「米方船方」に關係する者共は、「働方薄、渡世ニ障候旨」を申立てたという。⁽⁴⁹⁾この報告を京都町奉行は明和八年七月に所司代土井大炊頭を通して幕府に提出しておいた所、安永三年六月になつて幕府勘定奉行よりの書付で、「右通船致出来、米直段ニ相響、高値ニも可成訳も有之候ハ、弥以宜筋ニ相聞」⁽⁵⁰⁾と、通船によつて米値段が高くなるのは良い事なので、もつと良く吟味するようにとあつた。そこで再び京都町奉行は大坂表上間屋等と呼んで吟味した所、西国米入津の時節に、東国・北国の米穀が同時に入津しては、米値段は下値となり「御払米高ニも差支可申旨」⁽⁵¹⁾を答えたという。京都町奉行はこの方が正しいだろうとしている。

次いで安永五年三月、京都町奉行は大津米屋共の吟味も行った。

丹後国由良湊より山城国嵯峨川致通船、東国・北国・丹後・丹波・山陰道之内浦続之国々之米穀諸産物、買積又

は運送引受、京大坂え差登せ候儀、願人有之候、右願之通差免候而も米相場に相響、大津表米屋共障りに相成候儀は無之候哉、此訳可申聞候、

と聞き糺したところ、大津御用米会所頭取、船屋三郎兵衛他は、四月三日付の返答書で、「大坂京都え入米仕候而は、右大津表之払米捌方薄く罷成、大津表衰微仕」るとし、「右通船出来不申候様、被仰付被下候ハ、難有」と、通船を阻止しようとしている。⁽⁵²⁾

一方、通船願人兩人へは、今度の計画は大坂表まで運送となつたので、「桂川筋井堰掛り村々并川縁之村方え致対談候哉」と尋ねたところ、「此儀ハ兩人共無心付、是迄対談いたし候儀無之候間、右村々対談いたし候上否申出度」と安永四年四月に吟味猶予願を提出している。⁽⁵³⁾そして六月には、願人河村与惣右衛門は町奉行所の指示により、嵯峨より下鳥羽まで、桂川の通船許可を京極宮役人中へ出願した。⁽⁵⁴⁾また、城州水尾村より下流川筋の村々へは再対談し、五一ヶ村の内八ヶ村は差支なしとして一札を取替し、残四三ヶ村は何分通船が始まつた上でなくては返答できないという書付を差出したという。⁽⁵⁵⁾願人六兵衛は嵯峨川桂川筋村々の内、嵯峨天龍寺領の村々は差支ないという證文を取替わしたが、その他は対談中であるという。その後六兵衛は病氣のため動けなかったが、病氣全快後に対談を続け、安永七年八月には、五一ヶ村の内九ヶ村は承知、四二ヶ村は不得心であつたという。⁽⁵⁶⁾

安永八年八月、京都町奉行所は、これらの事情を詳しく書いて勘定奉行・同吟味役の意見を聞いた。その上で安永九年三月、願人や関係者の差出した書付の写帳四冊を添えて、この願を却下するか、なお吟味を続行するとすれば京都町奉行の支配外に及ぶので代官の見分とするか、両様の判断の伺書を京都所司代久世出雲守を通して幕府に

提出した。京都町奉行は勘定奉行等に対しても、恐らくこの同書は幕府老中からそちらに廻るであろうと思われるので、よろしく処置していただきたいと云う切紙を送っている。⁽⁵⁷⁾

その後、どのような結果が出たか明らかではないが、恐らく幕府の許可は下りなかったものと思われる。

六 天明期の計画

天明四年、武州三河嶋村の清水与惣右衛門と、その加談人である京都の紙屋忠兵衛は、「丹後国由良湊々北国七ヶ国丹後・丹波并京都之諸荷物往返通船之儀、御勘定所江奉願上」と、北国および両丹地方の諸荷物を京都に運び、京都の諸荷物を北国に運ぶ由良湊からの通船の許可を幕府勘定所に願い出た。⁽⁵⁸⁾

この通船願人・清水与惣右衛門は、また「東叡山領武州豊嶋郡三河嶋村百姓三郎兵衛方ニ居候与惣右衛門」ともあるように、三河嶋村には一時的に居留する人物で、明和、安永期の出願人・淀の河村与惣右衛門と姓は異なるが同じ一族であることは確かである。⁽⁶⁰⁾ それ故、前の出願との継続性も考えられるが、今度の計画は半公営のものではなく、京都嵯峨材木町に問屋を置くが、殿田村より大堰川を下る輸送は、既に成立している角倉船に全てを依頼するもので、願人達は由良湊より由良川を黒瀬村までの舟運と、黒瀬村より殿田村までの陸運を新たに開発しようというものであった。⁽⁶¹⁾ これによって前出願でみられた角倉家の強力な反対を押えたのである。

また、由良川沿岸の村々に対しては対談を進め、同年七月には船井郡中村・大倉村等と、先願人長栖屋次兵衛が

取替わした対談書を基に、先願人と「内仲ヶ間之者」であるという事で、全く同じ条件で対談書を取替わしている。⁽⁶²⁾
また、小畑村・安栖里村等園部藩領村々ともヶ條書を取替わした。⁽⁶³⁾このようにして、おそらく由良川沿岸村々との対談を済ませていったのであろう。

一方、大坂商人等の反対への対応として、これ迄大坂に廻っていた諸産物の輸送は一切引受けず、新たに出る荷物のみを積む。その新旧荷物の判定は、加賀国金沢の宮腰湊に問屋を置いて検査する。なお引受ける新荷物とは次の一二四品目であるとして、品名を書上げて江戸勘定所へ出願している。⁽⁶⁴⁾勘定所はこれを天明五年七月、大坂の米方年行司、上問屋、上積米屋等へ示して、差障の有無を糺した。大坂米方年行司等は、新荷物として示された品目の内、黒大豆と小豆を除き、また米穀を積まないのであれば、何の支障も無いと答えている。⁽⁶⁵⁾

次いで天明七年七月、幕府は願人と惣右衛門が、黒大豆・小豆および米穀は決して積まないと云うが、それで支障はないかと再度大坂町年寄等に返答書の提出を命じている。⁽⁶⁶⁾

また、川縁村々との相対證文取替が済んだとの報告を受けた幕府は、天明六年八月、代官による村々見分の実施を決定し、代官平岡彦兵衛の手代富田新兵衛と野田松三郎手代内田宇八を現地に派遣して、村々の吟味を実施している。⁽⁶⁷⁾

しかし、この後は何の動きもなく、やはり幕府の許可は下らなかったものと思われる。

七 文政・天保期の計画

文政六年、園部領本庄村の書付に、「下植村ニて西村正司与申仁尋来、通船願心之旨申立、村々江段々ケ条書取替置候⁽⁶⁸⁾」とあつて、この年十一月、西村正司なる者が、通船願のため園部領二八ヶ村との間で「ケ条書」を取替わしたことが知られる。しかし、西村正司がどの様な人物か、実際に幕府に出願したのか、それがどの様な計画であつたのか等は、今のところ全くわかっていない。

それから四年後の文政十年、淀の河村与惣右衛門はまたく出願したらしい。四月には天明四年の清水与惣右衛門の仕事を引き継いで、川下から沿岸村々との対談書取替を進め、由良川上流の園部領村々に来て⁽⁶⁹⁾いる。

しかし今度は、幕府はこの通船計画に積極的な姿勢を示した。江戸勘定奉行所組頭はこの件につき園部藩に達書を送つたので、藩は関係村々の惣代三人を立てて、与惣右衛門の対談書取替に対応している。園部領の内二十八ヶ村は惣代を通して申立て、西村正司の件があるので連印は出来ないが、通船に「聊茂故障者無之」と答えている。⁽⁷⁰⁾

同年閏六月には、江戸の宮津藩留守居役が幕府勘定所と呼び出され、勘定奉行遠山左衛門尉の意向として勘定組頭吉見儀助、勘定小嶋祐助より申し渡された。それは願人河村与惣右衛門方に祖父清水与惣右衛門が天明年中に村々と取替わした対談書はあるが、年数も立っているので、新しく対談する様にと申し渡したところ、廻村の上「差障無之」という書付を取り終えて、出府して提出した。この通船計画は、河口より大嶋村（綾部市）までは既に通船があるので、それより「大草野之内鷹巣迄手入ニいたし、胡麻川筋江取付ケ、船井郡殿田村迄新規通船取開、

夫々在来り保津川間屋江諸荷物差送り候積」であるという。これに、領分内での支障の有無を糾して欲しいのとこのだった。⁽⁷¹⁾

河村与惣右衛門の沿岸村々との対談が大方済んだと思われる文政十一年二月、幕府は勘定格及び普請方の役人を見分方として現地に派遣した。⁽⁷²⁾ 見分方役人の廻村と共に、河村与惣右衛門の手代泉善平・鈴木真助等もこれに同行したらしい。高屋川上流の尾長野村、広野村、大堰川付の殿田村は、この幕府役人の廻村を機に通船についての議定書を手代との間で取り替えている。⁽⁷³⁾

また同年十一月には、輸送荷物の着く京・嵯峨・梅津・桂などの材木商・竹屋・挽板屋仲間は、京都町奉行の尋問に答えて、「与三右衛門手筋之者より諸荷物売捌等不致趣」、即ち与惣右衛門が輸送荷物の売買に参入しないのならば、何の支障も無いと返答している。⁽⁷⁴⁾

このように幕府は、京都町奉行や江戸勘定奉行所役人の現地派遣等を通して各方面への尋問をくり返した。このため関係村々では「公儀御役人様御通行ニ付、諸入用多分相懸り」と、臨時の多額の出費で困窮したという。園部藩領の村々では、このため藩に拝借銀を出願し、殿田村他二十八ヶ村で銀札三貫目の拝借を許されている。⁽⁷⁵⁾

この通船の最終計画では、「大嶋村々同国船井郡殿田村迄、川丈ヶ陸路共凡拾里餘之處」即ち由良川は上流綾部下の大島村より大堰川上流の殿田村まで十里余の水・陸路の工事が中心であり、「大嶋村々綾部村迄壹里餘之間、堰三ヶ所有之場所者、継替継船致」と途中にある堰では船を変えて荷物を積替え、「同川筋七里餘川上之黒瀬川水元・鷹之巢二箇荷物河岸揚致」と、由良川支流黒瀬川の源流、鷹之巢に河岸場を設けて荷物を陸揚げし、それより「大原野

之内拾六町餘牛馬ニ附越」と、陸上を牛馬の背或るいは車で運び、大堰川の支流胡麻川に付いた所から「胡麻川ニ而又々船積致、保津川筋殿田村在来河岸場迄、凡壹里半餘運送致」と、胡麻川を一里半余、川船で、殿田村まで下る。殿田村よりは「同所々嵯峨迄者角倉帶刀差配ニ有之」と、既に角倉家によって大堰川水運が開かれていたので、これを利用して京・嵯峨まで送るというのである。このルートで輸送する予定の荷物は、

一、竹木并竹細工、木地下地類

一、莞延、簍笠、柳合利類

一、石細工物、焼物類

一、菜種類并鬼燈、山椒柿、栗、茶、煙草、索麴類

一、蠟、漆、油類并紙類、魚類

とある。ここで注目すべき点は、輸送荷物として最も重要な米穀類が含まれていないことである。これは明らかに前回の出願での大坂、大津の米商人の反対を考慮したもので、通船計画としては後退と云わざるを得ない。しかし、このような妥協によってようやく各方面の合意を取り付けることができたのであろう。

こうして文政十三年五月、ようやく幕府の許可が下った。河村与三右衛門は「由良川筋新規取開通船支配」を仰せ付けられ、通船方元締役所を開いて、通船条目や問屋株・船株・車株等の覚書を定めている。また由良湊より京、大坂までの荷物運賃や船頭、水主の賃銀、積船配置等を詳細に定めた計画書も作成した(表2参照)⁽⁷⁶⁾。

そして同年六月には、由良川上流で通船路開削工事に着手した。「六月十八日(天保元年)井坪新川堀始、日々

表 2 文政13年 由良湊一京・大坂輸送計画

	由良湊	河 守	福知山	綾 部	山 家	大 坂	計
距離	6.0里	2.5里	3.0里	2.0里	3.0里	1.0里	
運賃(1駄)	0 ⁴ / ₁₀ 厘	0 ⁵ / ₁₀ 厘	0 ⁶ / ₁₀ 厘	0 ³ / ₅ 厘	1 ⁴ / ₁₀ 厘	0 ⁴ / ₇ 厘	
設置予定船(車)数	15 艘	30 艘	40 艘	20 艘	50 艘	40 艘	
船(車)の規模	100 ¹ / ₂ 駄	25 ¹ / ₂ 駄	20 ¹ / ₂ 駄	20 ¹ / ₂ 駄	15 ¹ / ₂ 駄	10 ¹ / ₂ 駄	
船(車)の乗組員	5 人	4 人	4 人	4 人	5 人	5 人	
往復回数	2日-1度				1日-2度	1日-2度	
船頭賃銀(1日)	5 ⁴ / ₁₀ 厘	4 ⁴ / ₁₀ 厘	4 ⁴ / ₁₀ 厘	4 ⁴ / ₁₀ 厘	4 ⁴ / ₁₀ 厘	4 ⁴ / ₁₀ 厘	
水主賃銀(1日)	3 ⁴ / ₇ 厘	2 ⁸ / ₃ 厘	2 ⁶ / ₇ 厘		3 ⁴ / ₁₀ 厘	2 ⁴ / ₇ 厘	
船(車)株1艘請金	100 ¹ / ₂ 両	25 ¹ / ₂ 両	20 ¹ / ₂ 両	40 ¹ / ₂ 両	15 ¹ / ₂ 両	20 ¹ / ₂ 両	

黒瀬	殿田	嵯峨	京都・堀川	計	嵯峨	淀	大坂	計
(2.5)里	8.0里	50 ¹ / ₂ 丁	29里14 ¹ / ₂ 丁		4.0里	9.0里		41.0里
1 ⁴ / ₇ 厘	3 ⁴ / ₂ 厘	1 ⁴ / ₁₀ 厘	9 ⁴ / ₅ 厘	9 ⁴ / ₅ 厘	0 ⁴ / ₅ 厘	1 ⁴ / ₁₀ 厘		10 ⁴ / ₁₀ 厘
(75)輛	嵯峨船屋	25 輛			20 艘	過書船屋		
(5)駄		5 駄			25 駄			
		(2)人			4 人			
1日-2度		1日-2度						
		4 ⁴ / ₁₀ 厘			4 ⁴ / ₁₀ 厘			
2 ⁴ / ₅ 厘		(2 ⁴ / ₅ 厘)			2 ⁴ / ₈ 厘			
10 ¹ / ₂ 両		25 ¹ / ₂ 両			25 ¹ / ₂ 両			

由良湊一京・大坂間運賃、1駄運賃十間屋口銭・改料等＝12⁴/₅分

() 内は推定。

百五十余為働、十一月十九日出来、弁財天勸請、十二月通船始」とあつて、井坪新川は十一月に完成、十二月には通船を開始している。⁽⁷⁷⁾しかし「其翌辰歳（天保三年）八月、再普請」とあるように、再び工事を施さなければならず、安定した通船路を維持する事には非常な困難があつたようである。その故か、幕府の許可が下つた以後、この新規開通ルートに大量の物資輸送が現れた形跡が殆どみられない。恐らく計画通りの通船工事を完成することができず、工事は中断したのではなからうか。

八 文久・元治期の動き

文久元年十一月、京都代官・角倉福次郎は「川筋御見分」として園部藩領の村を廻っている。⁽⁷⁸⁾これがどの様な目的を持ったものであつたかは不明であるが、幕府がなかなか進捗しない通船工事に活を入れようとしたのではなからうか。

文久三年三月、京都が將軍家茂の上洛、尊攘問題で騒然としている頃、幕府は触書を出して「京地近海江蜃船渡来」の時は勿論、平常でも京都守衛の諸大名の人数が入込み、兵根米以下市民の食料・薪炭等が欠乏しないよう、諸国より京への米穀・日用品の廻漕を促した。そして「猶、船車増、或ハ新道・新川開拓之義をも心付候ものハ、其筋江可申出」と、新輸送ルートの開発を奨励している。⁽⁷⁹⁾

この方針に沿ってか、幕府は再び由良川―大堰川輸送ルートを重視する。同年六月十三日には福知山藩の奉行佐原将曹を「河村一件ニ付」として京都に呼んでいる。⁽⁸⁰⁾「河村一件」の内容は明らかではないが、河村与三右衛門の通船計画に対して、関係諸藩の協力を要請したのではなかろうか。

同年六月十七日には、「和知川并二胡麻川筋通船御開」、即ち由良川、大堰川両水系の結節点の開発を、河村与三右衛門の俣内蔵之助が命ぜられ、工事の請負希望者を募集している。⁽⁸¹⁾また朝廷よりも「西川筋通船相成候様」と河村与三右衛門が仰せ付けられたという。⁽⁸²⁾次いで六月二十三日より二十五日にかけて京都町奉行与力二名と河村内蔵助が随伴して上林、和知、山家から由良湊まで川筋見分を行っている。⁽⁸³⁾また十一月にも、京都町奉行与力野村鉄三郎と同心深山弥五右衛門・村田文蔵、それに河村内蔵助とその手代二名が付いて、「由良川筋通船路見廻御用」として廻村している。⁽⁸⁴⁾

その後、河村内蔵助は京都に「由良川通船方」という役所を設けたらしく、元治元年四月には「開通御用」として由良川支流高屋川の黒瀬村まで先触を出しているし、⁽⁸⁵⁾五月には沿岸村々に手代を廻村させ、京都有用の品は、何によらず由良川筋を勝手に積登ることの承諾書を沿岸船持から取っている。⁽⁸⁶⁾

しかし、それでも京都行の大量の物資の輸送が実現した痕跡はみられないが、「綾部二而船式三艘相拵、河村氏之印之幟を建て、通船いたし候」⁽⁸⁷⁾とある如く、河村氏は専用船を建造しているし、元治元年十月には「川村通船方」の「御用船」が、由良、神崎の塩を福知山より上流の戸田村まで積んで、問題となっているので、由良川上流では「河村船」が活躍していたことは知られる。⁽⁸⁸⁾

まとめにかえて

東北日本と大坂・京都を結ぶ巨大な物資流通、その中心をなす西廻り海運の効率化と危険回避を目的とした由良川・大堰川水運路計画は、江戸・大坂等の商人によつて考えられ、幕府への出願がくり返された。幕府は関係村々の同意を許可の前提としたので、願人は関係諸藩や沿岸村々を廻つて同意書を取る努力をくり返した。幕府も大坂・大津等の商人仲間の意向も調査し、代官等を派遣して現地調査等も実施したが、なかなか許可は下さなかつた。願人も簡単には諦めず、年代とともに人は変るが同様な出願が繰り返され、特に淀の河村氏は親子数代にわたつて出願人となつて、出願をくり返している。

文政期以後は異国船渡来の危機感もあつて、幕府もこの計画の意義を認識し、ついに許可が下つて通船路開削工事が開始される。しかし由良川上流部での工事は難行して中断した。幕末に至つて朝幕関係の堅張、異国船渡来など内外の政治情勢緊迫化の中で、幕府・朝廷の権力側にとつても京都への物資輸送路の確保は重要な課題となり、この計画は再認識されて、幕府主導による計画実現が計かられるが、ついに実現を見ずに終つた。

しかし、東日本と京・大坂を結ぶ物資輸送の重要性は、この様な水運路開削Ⅱ運河造成を繰り返し計画させ、実行させたのである。

註

- (1) 古島敏雄『江戸時代の商品流通と交通』(昭和二六)、四二頁。
- (2) 村上佑二「由良川交通史の課題について」(『綾部史談』二五、昭和二八)。
- (3) 藤田叔民「幕末期の内陸通船運送事業に関する一考察」(『丹後由良湊から京都嵯峨間の通船』)(『史学仏教学論集』乾(昭和四八)。
- (4) 杉本嘉美「江戸時代の由良川舟運について」(『両丹地方史』三三、昭和五六)。
- (5) 芦田完「由良川水運史、附播丹運河」(『史談ふくち山』、昭和五七)。
- (6) 「福知山藩日記」(『福知山市史』史料編1、二七八頁)。
- (7) 拙稿「由良川・加古川連結通船計画について」(『千葉経済論叢』第三四号)中の「由良川の水運」参照。
- (8) 「役所日記抜書」(『綾部市史』史料編、一二四頁)。
- (9) 「役所日記抜書」(『綾部市史』史料編、一二二頁)。
- (10) 註(9)に同じ。
- (11) 「瀧洞歴世誌」(『大江町誌』史料編、一二三頁)。
- (12) 「覚書牒」(『大江町誌』史料編、九五頁)。
- (13) 「役所日記抜書」(『綾部市史』史料編、一二四頁)。
- (14) 註(11)に同じ。
- (15) 註(14)に同じ。

由良川・大堰川連結通船路計画について 川名

- (16) 「由良湊より嵯峨川通船願之儀に付伺書案^并御勘定奉行え差遣候切紙写」(『海事史料叢書』第一七卷、四四三頁)。
- (17) 享保七年十月二十七日に、大坂南庵徳町の山城屋吉右衛門が提出した「覚」(『和知町誌』史料集(三)、四三三頁)によると、山城屋の親・猪兵衛は田辺屋と組んでいたと思われるので、田辺屋も大坂商人であろう。
- (18) 宝永三年「手形之事」(位田区有文書、『福知山市史』第三卷、六三四頁)。
- (19) 註(18)に同じ。
- (20) 註(18)に同じ。
- (21) 享保七寅十月廿七日「覚」(『和知町誌』史料集(三)、四三二頁)。
- (22) 註(21)に同じ。
- (23) 享保十年二月「役所日記抜書」(『綾部市史』史料編、一六五頁)。
- (24) 註(23)に同じ。
- (25) 親・猪(伊)兵衛を襲名したのであろう。
- (26) 註(16)に同じ。
- (27) 註(16)に同じ。
- (28) 註(16)に同じ。
- (29) 宝暦九年九月「為取替一札」(『和知町誌』史料集(三)、四二四頁)。
- (30) 註(16)に同じ。
- (31) 註(29)に同じ。

(32) 宝暦九年「役所日記抜書」(『綾部市史』史料編、三〇〇頁)。

(33) 註(32)に同じ。

(34) 註(32)に同じ。

(35) 宝暦九年二月「一札」(『福知山市誌』下巻の一、三三〇頁)。

(36) 註(29)に同じ。

(37) 宝暦十一年六月「通船為取替證文之事」(村上佑二「由良川交通史の課題について」『綾部史談』25、所収文書)。

(38) 註(16)に同じ。

(39) 註(16)に同じ。

(40) 註(16)に同じ。

(41) 未六月「乍恐奉願候口上書」(村上ちよ所藏文書、藤田叔民「幕末期の内陸通船運送事業に関する一考察」『史学仏教学論集』乾)所収)。藤田氏はこの「未」を天保六年と考えられたようだが、安永四年であろう。

(42) 「保津川沿岸図」(京都府立総合資料館蔵)。この絵図には後に計画書が付いており、年代は不明のものであるが、絵図中の領主名を調べてみると、書かれた時期が、明和四年から八年の間に限定されるので、明和七年の願書に付随するものと推定した。

(43) 註(42)に同じ。

(44) 註(42)に同じ。

(45) 註(42)に同じ。

(46) 註(16)に同じ。

(47) 註(16)に同じ。

(48) 寅八月二十六日「御触及口達」(『大阪市史』第三、七七六頁)。

(49) 註(16)に同じ。

(50) 註(16)に同じ。

(51) 註(16)に同じ。

(52) 安永五年「乍恐口上書」、「京都^え御返答書」(『天津市史』下巻、八一頁)。

(53) 註(16)に同じ。

(54) 註(41)に同じ。

(55) 註(16)に同じ。

(56) 註(16)に同じ。

(57) 註(16)に同じ。

(58) 天明四年七月「為取替一札之事」(『和知町誌』史料集(三)、四三四頁)。

(59) 天明五年七月「由良川筋通船荷物之事」(『大阪市史』第三、一〇九三頁)。

(60) 文政十年「書付之事」(『和知町誌』史料集(二二)に、「河村与三郎内武州三河嶋村清水与三右衛門」とあり、また文政十年の「本莊家譜」(糸井文庫)に「与三右衛門祖父与三右衛門義、天明年中願立」とあって、天明四年の願人は河村与三右衛門の祖父であったという。

- (61) 註(58)に同じ。
- (62) 註(58)に同じ。
- (63) 文政十年「書付之事」(『和知町誌』史料集(二)、二九七頁)。
- (64) 天明五年七月「由良川筋通船荷物之事」(『大阪市史』第三、一〇九三頁)。
- (65) 天明七年七月「由良川筋通船荷物之事」(『大阪市史』第三、一一九七頁)。
- (66) 註(65)に同じ。
- (67) 天明六年「役所日記抜書」(『綾部市史』史料編、三六三頁)。
- (68) 註(63)に同じ。
- (69) 註(63)に同じ。
- (70) 文政十年四月「書付を以申上候」(『和知町誌』史料集(二)、二九九頁)。
- (71) 「本莊家譜」(糸井文庫・舞鶴西図書館藏)。
- (72) 文政十一年二月「役所日記抜書」(『綾部市史』史料編、五四六頁)。
- (73) 文政十一年二月「議定一札」(『和知町誌』史料集(三)、四九五頁)。
- (74) 文政十一年十一月「就御尋口上書」(村上ちよ家文書、藤田叔民「幕末期の内陸通船運送事業に関する」〔考察〕所収文書)。
- (75) 文政十一年十一月「書付之事」(『和知町誌』史料集(三)、四七九頁)。
- (76) 「通船之條目」并問屋株訳書」(梅原三郎「由良川交通史資料」、「両丹地方史」三〇号、所収文書)。
- (77) 「由良川八景・裏書」(『和知町誌』第一卷、六五一頁)。

(78) 文久元年十一月「申達候」(『園部村庄屋日記』、『園部町史』第四卷、五一四頁)。

(79) 文久三年三月十三日『幕末御触書集成』第六卷、一六九頁)。

(80) 「五番萬集録」(『福知山市史』史料編三、七五三頁)。

(81) 文久三年六月「申達候」(『園部村庄屋日記』、『園部町史』第四卷、五四五頁)。

(82) 「五番萬集録」(『福知山市史』史料編三、七五四頁)。

(83) 註(82)に同じ。

(84) 「五番萬集録」(『福知山市史』史料編三、七六一頁) および「園部村庄屋日記」(『園部町史』第四卷、五五五頁)。

(85) 「園部村庄屋日記」(『園部町史』第四卷、五七一頁)。

(86) 「六番萬集録」(『福知山市史』史料編三、七七二頁)。

(87) 註(82)に同じ。

(88) 「六番萬集録」(『福知山市史』史料編三、八〇一頁)。